

## ミュージック・ビデオの映像人類学

—楽曲/映像共同制作を用いた参与観察法により開拓される共有人類学の新天地—

矢野原 佑史

発表者は、2005年度よりカメルーンの首都ヤウンデにおいて、現地のヒップホップ・カルチャーとそれを実践する若者（特にラッパーや歌手）たちに関する音楽人類学的研究を行ってきた。現地で調査対象者の若者たちと対話を重ねるうち、彼らの間で、「ヒップホップ・ミュージシャンとして成功するためには、自身の楽曲を映像化した『ミュージック・ビデオ』をインターネット上の動画サイト（主に Youtube）にアップロードすることが必然である」と認識されていることが理解された。そこで発表者は、参与観察の一環として、現地の若者たちとの楽曲/映像共同制作を試みた。中でも、調査対象者のひとりが主導権を握って制作した『How I See』という楽曲では、その調査対象者の要望に応える形で、調査者自らが「ラッパー」として楽曲中に出演することとなった。彼らとの作品制作過程と完成した作品の分析を行った結果、先行研究では描かれてこなかったアフリカにおけるヒップホップ・カルチャーの演出性や、ファンタジー性を含むヒップホップ・ミュージックと日常生活の関連性、若者たちのクリエイティビティを発動させる要因となる楽曲構造などに関する新たな知見が得られた。また、音文化研究を行う上で、『語りと音楽』を用いて伝えられるストーリーを視覚化することの意義や、そこから生起（再起）する「語り/音楽/映像の関係性」という議論点も見出された。

本発表では、まず、発表者が現地において共同制作した2つのミュージック・ビデオ、『Out The Door（2006年制作）』と『How I See（2009年制作）』の制作背景と制作過程について述べる。次に、各作品の上映を行い、作品の構造と、制作後の出演者/オーディエンスからのフィードバックについて分析する。最後に、制作過程と制作結果の照合分析を行い、調査対象者たちと制作過程を共有することにより可能となった「音楽/映像作品が持つメッセージの新たな分析方法」について議論する。